



眞鍋 倫子 准教授

Rinko Manabe

自立の先に、 幸せがある

「女の子だけ、なぜこんな役割を求められるの？」

眞鍋先生のお母さんは、活動的な兼業主婦。先生は小さな頃から自立を求められてきた。中学時代は、その日着るシャツに自分でアイロンをかけるのが毎朝の習慣。高校時代に両親が仕事で10日留守にした時には、母親代わりに家を切り盛りできるほどの家事能力を身に付けていた。けれど、ふと気づくと、二人の弟はそうしたことをほとんど教わらず、母親任せのまま成長していた。「なぜ自分だけこんな

役割を求められるの？」という思いが、やがて研究者生活の第一歩となるジェンダー（社会的・文化的な性の在り方）の研究へと先生を導いていく。

「男の子・女の子という立場に付いてくる役割や、周囲が寄せる期待の内容はかなり違う。そうした問題を追究するのが『ジェンダー論』だということを知り、興味を感じました」入学した大学でこのテーマを扱う自主ゼミ（正規の授業以外で設けられる学びの場）が開設されると先生も参加、ジェンダーについての学びを深めていった。

大学教育を受ければ、 女性は生涯働ける？

やがて先生は「女性の職業達成に教育がどう関わるか」という、現在の研究テーマに着手。教育を受けることで、仕事を含めた女性のライフコース（人が生まれてから死ぬまでにたどる道筋）はどう変化するかを追究し、女性と労働についても見極めていく。

「大学教育を受けると就業率が高まる、大卒女性は男女平等への意識が高い」という文献を数多く目にしましたが、私の実感とは食い違っていました。私が大学院で学んでいる間に、周囲の友人たちは次々に結婚し家庭に入ってしまった。そこで統計資料を改めて分析すると、大卒女性の中にも結構、結婚や出産をきっかけに働くことを止め、そのままの人がいる。大学教育を受けた女性みんな生涯働くわけではない、けれど、自分の生き方を自ら決めて歩んでいくには、経済面を含めた自立が欠かせません。女性が自立を獲得する方法ってなんだろう、と思いましたね」

確かに、労働環境面では大卒女性は恵まれている。大卒女性を採用する企業の中には、育児休暇制度を設けているところも少なくはない。しかし、仕事をがんばればがんばるほど、



眞鍋先生の著書・共著

ど、「この働き方をしながら子どもを産み、育てていけるだろうか？」という女性の問いはふくらむ。「大学教育を受けて、やりがいのある仕事に出産前まで携わってきた女性が、子育てがひと段落したから復職したいと願う。けれど、この社会はそうした女性が能力を活かせる環境になっていません。私が研究者として初めて、この問題をテーマに論文を発表したのが1996年。それから15年経つけれど、社会が変わったという感触はありません。この『変わらなさ』、問題意識が現実結び付かないことが、日本社会の一番の問題点ではないかと思えます」

日本のライフコースは、 男性のモデルがベース

先生は、「女性が生涯働き続けること」を難しくしている要因の一つ

が、「ライフコースの中立的なモデルが、男性をベースにしていること」だと分析している。「良い成績を取って良い大学に入り、良い会社に就職する。ここまでのコースには、女性も乗ることが出来ます。けれど、実は女性にとって総合職は未だ狭き門。結局、世話をしてくれる人がいる」ことを前提としたモデルが主流なんだな、と感じます。男性は家族を養わなければならないから給与が高額。他方、女性の給与は安くてもいいでしょう、とこの状態は男性にとっても望ましくない、と先生は指摘する。男性の労働負荷が重くなるからだ。「本来、私たちが生活を営むには、食事をつくらったり汚れたものを洗ったりという家事労働が欠かせません。その部分を女性に押し付けているから、男性は持てる時間をめいっぱい仕事に当てられる。それが働くということだ」という価値観さえ存在する。けれど、体力的にも精神的にも、人間はそこまで働けるものではありません。さまざまな問題ははらみながらも、こうした構造はまだ変わらない。「男性を基本としたライフコースは、もう限界だと思えます。今後日本の経済が飛躍的に成長することはないでしょうから、仕事の絶対量も減っていく。すでに多くの企業で正社員の数が絞

られ、これまで『標準的』とされてきたライフコースから男性までもがこぼれて、女性や学生の労働領域とされてきたパートやアルバイトなどに放り出されてきています」一方で、標準的なライフコースに乗らない選択をする人が今後増加する、と先生は見ている。「そこそこ働いてそこそこ自由な時間を得られた方がいい、と考える人が増えています。こうした考えの広がりには、社会がある種成熟してきたことの表れなのかもしれません」

結婚後に働きはじめ、 高卒女性の生き方に共感

女性が教育を受けることの意義を追究してきた先生。実は、高卒女性



Close up
クローズアップ



■ 眞鍋 倫子 (まなべりんこ) プロフィール

1970年11月3日、京都府生まれ。1989年、京都府立乙訓高等学校卒業。1993年、静岡大学人文学部社会学科卒業。1996年、京都大学大学院教育学研究科修士課程修了。2002年、京都大学大学院教育学研究科博士後期課程満期退学。東京学芸大学教育学部講師(教育学講座生涯教育分野)、同大学大学院教育学研究科担当(生涯教育分野)、中央大学文学部助教授等を経て現職。

■ 現在の研究テーマ

・女性の職業達成と教育

■ 高校生の頃の将来の夢は?

父が自営業を営んでいたため「会社員」がどんな仕事をするのかイメージできず、自分はマスコミ業界に入ろうかな……とぼんやり考えていました。イメージしていた職種は新聞記者。社会的な文章を書きたいと思っていました。

■ どんな高校生でしたか?

当時としては「とんがった」高校生だったと思います。生徒会の役員をしていたこともあって友達も多く、学校生活は楽しかったのですが、批判精神が旺盛で、嫌いな先生



の授業では内容を聞かずに別の教科の本を読んでいたりしました(苦笑)。

管理的な母親との関係も悪く、2年近くほとんど言葉を交わしませんでした。家が嫌いでしたがゲレるのも何か違うような気がして、合法的に(?)家に帰らずにすむよう、生徒会や、所属していた地学部の活動に力を入れていました。

■ 大切な1冊

・『長くつ下のピッピ』リンドグリーン(岩波書店)

私の原点です(笑)。算数はできないうし読み書きもあやしいけれど、世界中を航海してきたピッピは9歳ながら一人で生活し、知識も豊富。そのすごさと、はじけっぶりに魅了されました。「子ども」という存在に対して、大人が抱きがちなイメージを覆してくれる作品だと思います。



■ 高校生へのメッセージ

実際に向かい合って、顔を見ながらではないと、伝えたいことがうまく表現できません。ごめんなさい。不安だったり、いろいろと考えてしまうことはあるでしょうが、まずは行動してみましよう!

は、目を見張るものがあります。現場での体験を通じて、授業で習った内容がリアルに理解できる。教育を学ぶ学生にとって、とても意義のあるカリキュラムだと思います」

「ゆとり」を肯定的に受けとめよう

先生は学生と接していて、「真面目だなあ」と感じる人が多いそう。だ。「これはダメ」と枠を自分でつくっている印象があります。そうした枠を取り払うことは、本来は学校や親がしなければならぬのだけれど、「子どもの将来を考えると……」と、なかなかそうはならない。けれど現代では、良い大学を出て良い会社で正社員の地位をつかんだとしても、その先どうなるかはわからない。ならば、特定のライフコースにしがみつくりも、いろいろな生き方を視野に入れた方が、安心して歩んでいけます。そして、「この程度でいいじゃない」という考え方があっていい。日本社会はある意味で成熟期に入っています。裕福になるチャンスは少なくなるかもしれませんが、その分生まれる「ゆとり」にもっと価値を感じてほしいと思うんです。先生の明るい口調に、肩に込めていた力がふっと抜けるような気がした。



の生き方に共感することも多々あるそうだ。「収入や労働環境などから考えれば、女性が大学教育を受ける意義はかなりあると思います。けれど、結果的に専業主婦を選ぶ大卒女性はまだまだ多いし、職業活動を通じて社会とつながる」という意識について言えば、むしろ保守的だと感じることもあります。一方、高卒女性には出産して一度職を離れても、また果敢に働き始める人が多い。40代で見ると、意外にも大卒より高卒女性の方が、就業率が高いんです。自

立を意識した、まっとうな生き方だと思えます」とは言え、そうした女性たちも残念ながら本当の自立には至っていない、と先生は続ける。それは女性の労働に十分な賃金を支払わない社会構造に原因がある。「そして、稼いでいる男性も実際は自立していないと、私は思います。料理や掃除、洗濯など、生活を営む際に欠かせない根本的なことをしていない。今の日本って、女性も男性も自立しない社会になっているんですね」

女性の専業主婦志向が強まっている風潮も仕方ないこと、と先生は言う。「景気や労働環境が現在のよいうな状態だと、学歴で自分のステータスを高めて収入の高い男性と結婚し、家庭に入るのが一番合理的だと考える人が出てくるのは当然です」けれど、と目をくりくりとさせて先生は続けた。「結婚は計画通りにいかないもの。専業主婦という地位を獲得し守り続けるために何かを我慢し犠牲にするくらいなら、働いて自分で生活できるくらいの収入を得た方が、結局は幸せなのではないかと、私は思いますよ」

教育学だからこそ、「数字」にこだわる

教育学の教員として先生が大切にしていることを伺うと、「数字」と意外な答えが返ってきた。「統計データの読み取りには力を入れていきます。数字嫌いの学生は多いし、私自身もデータを扱うのは苦手だったので、彼らの気持ちはよくわかります。ですから、そのデータが表すものをなんとなく把握できればいい、と声掛けしますし、講義の際にはできるだけ丁寧な解説するようにしています」

なぜ、自身も苦手なのに数字にこ



これまでの教育実地研究の成果をまとめた報告書

だわることか。どんな現象が起きているのかを把握しやすく、考えを客観的に見つめるのに役立つから、と先生は言う。「教育学って、注意しないと、子どもの気持ち」など、感性的なものに流れてしまう。それは一つの視点としてあって良いのですが、同時に、それが事実なのか検証する意識も持たなくてはならない。そのためにデータが不可欠なんです」

このほか、教育学専攻ならではの学びの場として、先生は「教育実地研究」を取り上げた。「全国の教育の現場を訪れ、学生自らが設定したテーマに関する教育活動や施設を見学したり、関係者に取材して、考察し、その結果を報告書にまとめる」という授業です。訪問までの準備に約1年の時間をかけるものの、現地で過ごす5日間での学生の成長に